

[成果情報名] イチゴ‘きらび香’の育苗株数を半減する本ぼ増殖法

[要約] イチゴ‘きらび香’の花芽未分化苗を早期に本ぼに定植し、定植した苗からランナーを伸ばし苗を増殖する本ぼ増殖法は、定植株1株に対し1株増殖することで、増殖しない未分化定植と比べて頂花房の開花・成熟日、収量は変わらず、育苗株数を半減することが可能である。

[キーワード] イチゴ、高設栽培、本ぼ増殖法、未分化定植、育苗、花芽分化

[担当] 静岡農林技研・野菜生産技術科

[連絡先] 電話 0538-36-1588、電子メール agriyasai@pref.shizuoka.lg.jp

[区分] 野菜

[分類] 技術・普及

---

[背景・ねらい]

イチゴ栽培において、育苗は作業労力が大きく、頭上かん水や苗の密植等による炭疽病発生が問題となっている。また、普及が進む未分化定植法は、ランナー切り離し後本ぼに定植することで、育苗の省力化につながっている。ここでは、炭疽病発生リスクを低減し、さらに育苗株数を減らすよう、花芽未分化苗を早期に本ぼに定植し、本ぼで苗を増殖する本ぼ増殖法による栽培技術を確立する。

[成果の内容・特徴]

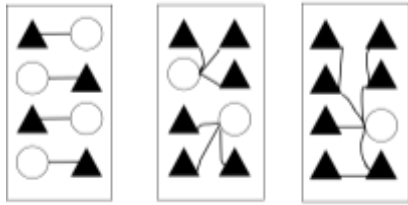
- 1 ランナー切り離し後、8月上旬までにイチゴ‘きらび香’の花芽未分化苗を千鳥に定植する(図1)。
- 2 本ぼに定植した苗からランナーを伸ばし、反対側で受けて1株増殖する(図1)。
- 3 定植後から花芽分化を確認するまで遮光を行い、原水+0.1dS/mのEC濃度で養液を給液する。花芽分化確認後は、慣行栽培と同様に管理する。
- 4 1株の定植株から1株増殖すると、定植から1ヶ月程度で増殖が終了し、頂花房の開花・成熟日は増殖なしの未分化定植と比べて同程度である(表1、図2)。収量も増殖なしの未分化定植や慣行の分化後定植と比べ同等である(図3)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 本データは、原水にEC0.3dS/mの井水を使用したものであり、花芽分化時期は培地の栄養条件や気象条件等により年次変動が生じる。
- 2 イチゴ‘きらび香’に適した栽培方法であるが、頂果房第1果に乱形果が発生しやすい。このため、増殖終了後は葉数2枚で管理し、草勢を抑える。‘紅ほっぺ’では頂果房初収日が遅れることに加え、鶏冠果や多芽株等が発生するおそれがあるため、本ぼ増殖法は適さない。
- 3 培地中の肥料濃度が高いと花芽分化が遅くなることが想定されるため、定植前に培地の除塩を実施する。
- 4 1株の定植株から増殖する株が増えるほど、増殖に必要な期間が長くなり、定植株の開花日が早くなり、増殖株の開花日は遅くなる(表1、図2、図3)。

[具体的データ]

【1株増殖】 【3株増殖】 【7株増殖】



○定植株 ▲増殖株 -ランナー

図1 増殖イメージ

表1 増殖期間、平均開花日の差異

定植時期	増殖株数	増殖終了日	頂花房		第一次腋花房		
			開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)	開花日 (月/日)	成熟日 (月/日)	
	1株	8/31	定植株	11/11	12/21	12/10	1/29
			増殖株	11/11	12/18	12/7	1/29
未分化定植 (8月上旬定植)	3株	9/18	定植株	11/11	12/18	12/2	1/29
			増殖株	11/11	12/21	12/10	2/2
	7株	10/18	定植株	11/6	12/14	12/2	1/25
			増殖株	11/11	12/21	12/10	2/2
	増殖なし		11/10	12/18	12/7	1/29	
分化後定植(慣行)				11/7	12/14	12/2	1/29

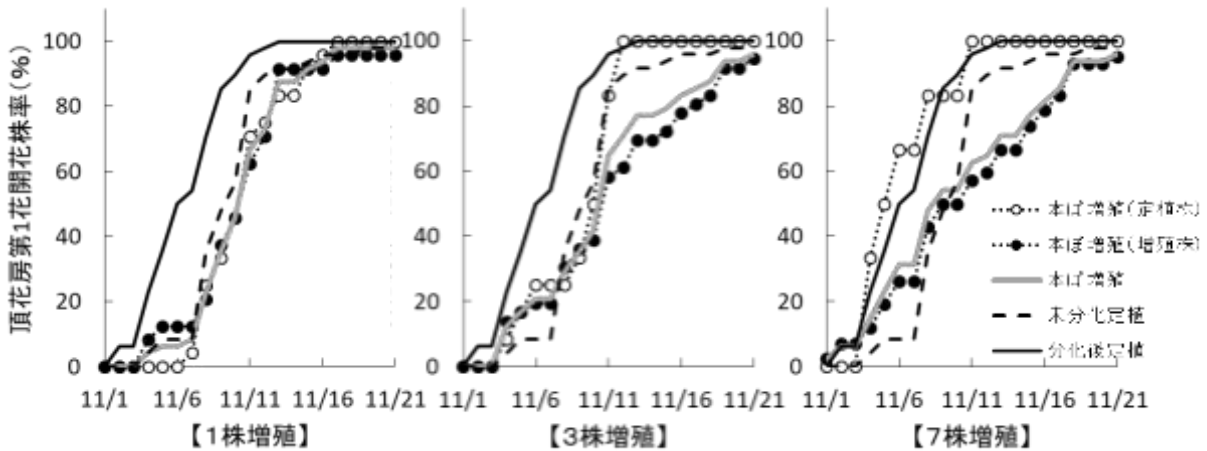


図2 頂花房第一花開花日の推移

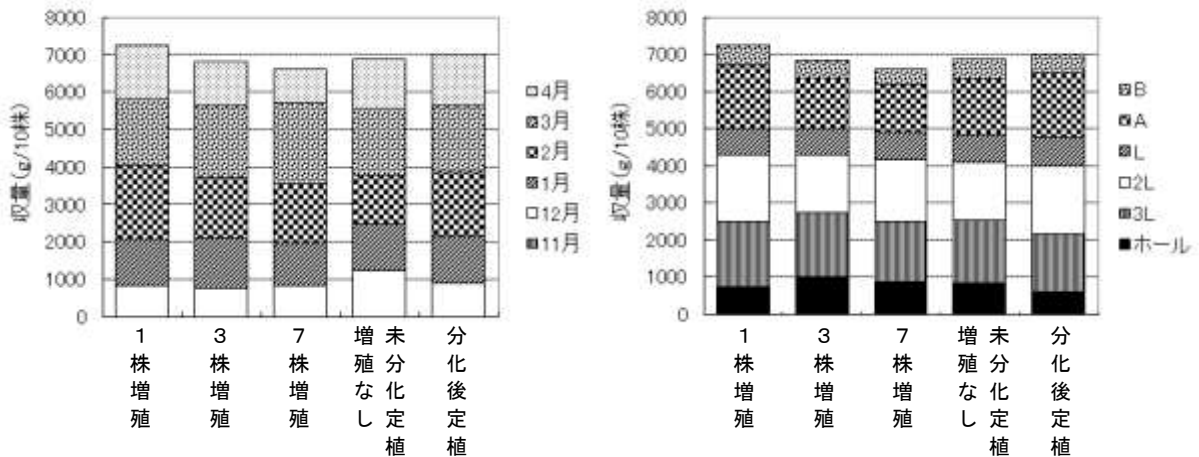


図3 増殖株数の違いによる収量の差異 (左: 月別収量 右: 階級別収量)

[その他]

研究課題名: 首都圏へ供給拡大!! イチゴ生産を革新する「超促成」「超多収」「高収益」システムの開発

予算区分: 新成長

研究期間: 2021~2023年度

研究担当者: 山口源貴、河田智明、望月達史、松田考平

発表論文等: なし